

持続可能な社会の担い手となる子どもを育てるために



麗澤大学大学院 学校教育研究科客員教授
広中 忠昭
学校教育センター

1. あるTVの一場面から

先日、あるTV番組を見ていると主人公の監察医がご



遺体に向き合い「本当のこと教えてください」と頭を下げる場面を見た。専門家であるはずの医師がご遺体に「教えてください」と真剣に手を合わせる姿が、最近考えている子どもの学びとつながった。

今回の学習指導要領では、これまで以上に児童・生徒の主体性を大切にし、子どもたちが社会の担い手としてこれから生きるために必要な資質・能力を身につけることを目指している。

2. 学習者としての教師

これまで以上に児童・生徒の主体性を大切にし、子どもたちが社会の担い手としてこれから生きるために必要な資質・能

れている。「子どもを引っ張る教師」から「寄り添う教師」、「伴走者としての教師」という言葉に象徴されるように、子どもと共に学ぶ学習者としての教師が求められているのだ。

いう意識を変えていくことは教育観 자체を変えることになるのではないだろうか。

しかし、これは簡単なことではない。私は長く教職という仕事をついてきた。教えたことが子どもに身についた姿を見たり、自分の授業で子どもの成績が上がったりすると素直にうれしいし、教えたかいがあると溜飲を下げることもある。逆にこんなに教え工夫しているのにと、望ましくない結果を子どものせいにしたこともあった。教師は教える人、子どもは教わる人と

学校では全教育活動を通して道徳教育を推進している。その要となるのが道徳科である。道徳科の内容は、教師と児童生徒が人間としてよりよい生き方を求めるための課題である。道徳性を養う手掛かりとなることを示している。具体的には学習指導要領が示す内容項目（道徳性を養う手掛かりとな

るもの）を計画的に学習するようになる。

ここで、注目したい言葉がある。「共通の課題」ということである。道徳科で扱う内容は、端的に表す言葉を使うと「友情、信頼」や「相互理解、寛容」のように改めて勉強しなくてもわかっていると思いやすい。「価値理解・人間理解・他者理解」という視点に加えて、学習の質を高めるための教材の活かし方を考える必要があるが、実際は教師のわかつていることや正しいと思うことを基にした「教える授業」になりやすい。

私は若いころ、自分の考えた発問に予想される反応を加えプログラムを組む授業の細案を作った時期がある。こうしたこと有力を入れることが子どもの深い学びになると思っていた。ある時、尊敬する先生より、「なんでそんなことをするのですか。そ

んなことをするからダメなんです」といわれて戸惑つたことがある。正しいと思うことを否定された気分になつた。先生は「わからないことはすべて子どもに聞きなさい」と指導してくださいました。

その意味はよくわからなかつたが、その後の自分にとつて授業づくりの上で最も価値ある指導として今に生きている。教師は何でもわかつているわけではない。そんな当たり前のことを見失してしまってはならない。そこで、初めて道徳科の内容は「共通の課題」となり、教師は共に学ぶ学習者となれる。

3. 「伴走者」としての私たち



育てるために、私たち自身の希望が必要だ。学校はともすると閉鎖的になりやすい。そのため、「開かれた教育課程」として、地域の「人・もの・こと」との関わりを大切に考えていく。子どもにとつて地域の大人はすべて教師であろう。私たち大人自身が人生に希望を持たなければ道徳教育は建前になつてしまふ。さまざまな課題を抱える現代社会だからこそ、私たち大人が置かれた状況を価値づけ、困難を乗り越えて希望をもつた生き方を示すことだが、子どもの「伴走者」としての大人の姿ではないだろうか。持続可能な社会の担い手を

育てるために、私たち自身の希望が必要だ。学校はともすると閉鎖的になりやすい。そのため、「開かれた教育課程」として、地域の「人・もの・こと」との関わりを大切に考えていく。子どもにとつて地域の大人はすべて教師であろう。

在り方・生き方についても見つめなおしてはどうだろうか。



講演会での筆者